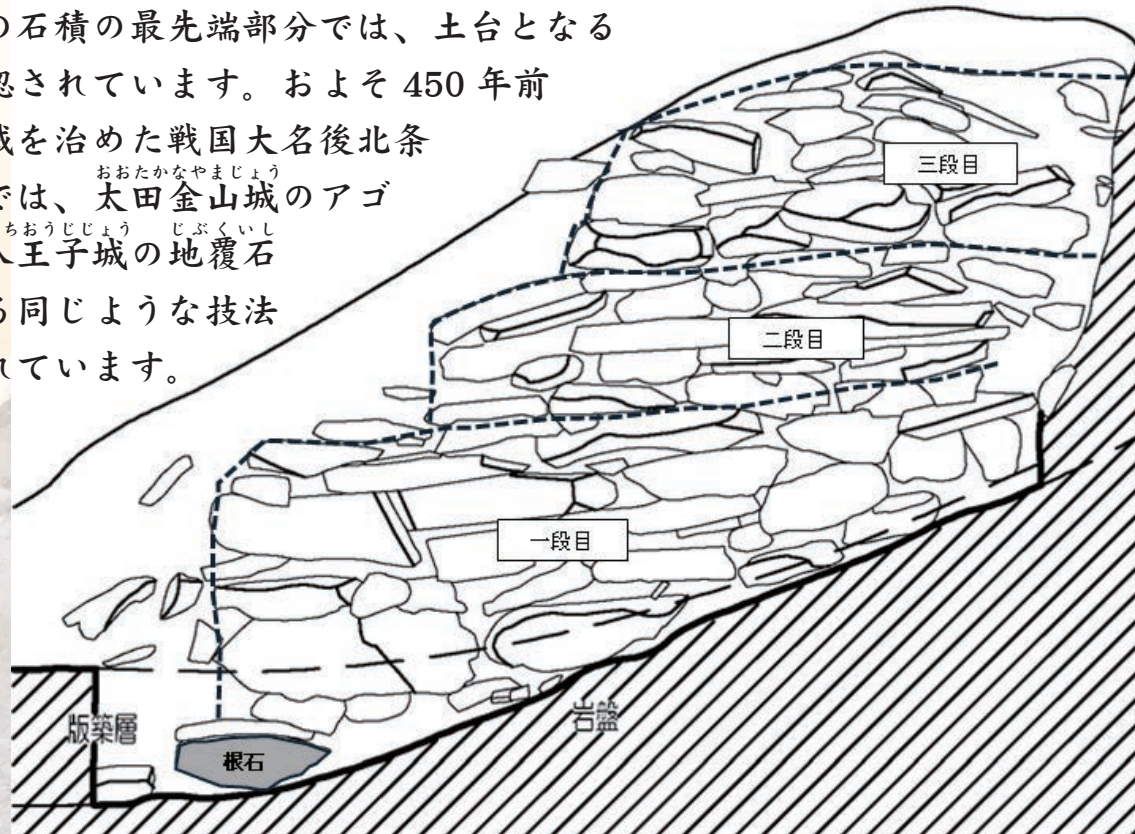


柵形虎口石積の断面図

また、この石積の最先端部分では、土台となる根石が確認されています。およそ 450 年前に関東地域を治めた戦国大名後北条氏の領国では、太田金山城のアゴ止め石、八王子城の地覆石といわれる同じような技法が用いられています。



築城にあたっては、相当量の岩盤を削る必要があったことが想定されます。小倉城跡の付近には、板碑（供養塔）石材の採石遺跡もあることから、石の扱いに慣れた板碑採石製作工人もしくはその系譜を引く人々が関わった可能性が高いと考えられます。

ときがわ町の宝物コレクション

柵形虎口では、宗教的な儀式に使用される香炉やお酒を飲む器として使う土器のほか、調理道具である播鉢なども見つかっています。戦国時代の小倉城にいた人たちの生活が伺われる品々です。

かわらけ



香炉



播鉢



ときがわ町の戦国

～国指定史跡小倉城跡の発掘調査報告～

ときがわ町の田黒地区には、戦国時代の歴史を今に伝える「小倉城跡」があります。国指定史跡「比企城館跡群《菅谷館（嵐山町）、杉山城（嵐山町）、松山城（吉見町）、小倉城（ときがわ町）》」の4城館跡の一つで、山の地形を巧みに利用して築かれた山城です。ときがわ町教育委員会がこれまでに行った発掘調査により、今からおよそ 450 ～ 500 年前の戦国時代に使用された城跡であることがわかってきました。今回は令和4年度に行った柵形虎口（出入口）地点の調査の一部を紹介します。



小倉城跡の鳥瞰図

柵形虎口石積



小倉城跡が築かれた山は、地元で下里石（緑泥石片岩・石墨片岩）といわれる岩から形成されています。

柵形虎口より本郭（城の中心地）へ続くスロープ脇の石積は、この下里石を削って基盤となる傾斜を造り、粘質土と細かく砕いた石をかませた上に石を積んでいる状況が判明しました。

そして、積石は直接石材を重ねていくのではなく、土を挟んでいることが確認されました。この技法は、比企地域では小川町腰越城、埼玉県北部では鉢形城、群馬県では箕輪城・岩櫃城、神奈川県では小田原城など、東国で広範囲にわたってみられます。